

氏名	井口 眞美		
学位の種類	博士（造形）		
学位記番号	第 D0008 号		
学位授与日	2020 年 3 月 19 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	和文	保育者としての専門性向上を目指す評価指標の開発 —造形活動を中心とする体験的な活動がもたらす 学生の学びの評価—	
	英文	Development of an evaluation index for the improvement of childcare workers' specialty: Evaluation of students' learning through practical experience with activities focusing on the plastic art field	
審査委員	主査	教授（研究指導補助教員）	石賀 直之
	副査	教授（研究指導教員）	小林 貴史
	副査	教授（研究指導補助教員）	井原 浩子
	副査	教授	池上 英洋
	副査	教授	田窪 麻周
	副査	東京造形大学 名誉教授	春日 明夫

博士論文要旨

昨今、幼稚園・保育所・こども園における保育の在り方が多様化し、保育の質向上が求められる中、信頼性、客観性のある評価が求められている。大宮（2006）は、ハウズとヘルバーンの研究を基に、保育の質を、「プロセスの質（子どもと保育者の相互作用）」「条件の質」「労働環境の質」の3つに分類しているが、その中でも、「プロセスの質」に着目し、「保育者が子どもにいかに関わっているか」を評価することが保育者としての専門性向上に繋がると考えた。そこで、本研究では、学生や新人保育者が「遊びを中心とした保育」において“子ども理解”を基盤とし、子どもとの“関わり”に着目して自らの実践を振り返ることのできる評価指標の開発を目指すことを目的とする。

また、保育者としての専門性獲得にあたり、学生時代にボランティア活動やインターンシップ等の体験的な活動に参加し、子どもと実際に関わる必要があると考えた。そこで、開発した評価指標を用いて、造形活動を中心とした体験的な活動がもたらす保育系学生の学びを専門性向上の視点から評価、測定し、明らかにした。ボランティア活動等の体験的な学びは、時に、反省的思考の機会をもたずに学びが定着しないこともあるが、活動後に評価指標を用いて、自らの取り組みを言語化し、省察する行為によって、学生の学びは、自覚化されるという効果が得られると考えた。

更に、検証事例として、児童福祉分野・医療分野における造形活動を取り上げ、その学びの特性についても言及した。

本論文の構成は以下の通りである。

①保育の質評価の在り方、保育者の専門性とは

「保育の質評価」に関して国内外の文献調査を行った。また、文献調査、事前アンケート調査等に基づき、本研究における「学生に求められる保育者の専門性」を明らかにした。

②専門性可視化のための評価指標の作成

保育現場でのアクションリサーチを行い、「遊びを中心とした保育」において「子どもの見とり」を基盤とし、子どもとの「関わり」に着目して自らの実践を分析的に振り返ることのできる評価指標「関わりの視点」の作成を行った。〈研究1〉

作成した評価指標を用いて、造形活動を中心とする体験的な活動がもたらす学生の学びを評価、測定し、明らかにした。ここでは、保育系学生が地域の体験的な活動に参加した実践調査に基づいて検証を行った。〈研究2〉

③評価指標の検証

体験的な活動の内容によって学生の学びは変化することが予想されたため、児童福祉分野における造形活動「子どもの居場所を作る会」〈研究3〉や、医療分野における活動「壁面製作、病児保育」〈研究4〉を事例として取り上げ、評価指標の検証を行った。

本研究で明らかになったことは、以下の通りである。

第1章では、研究に先がけ、「学生の学び」とは何かを文献調査によって明らかにした。本研究における「学び」とは、「状況的、社会文化的アプローチ」に基づき、「他者との相互作用の中での経験から見出された知識が内化する過程」と捉えている。学生は、子どもとのインフォーマルな関わりの中で、子ども理解を深め、子どもへの関わり方を体得する。体験的な活動、中でも造形活動を通して学生は、子どもと共につくったり描いたりする活動を楽しみながら、子どもの内面理解を深め、子どもとの関わり方や実践的な保育表現技術等、保育者としての専門性に関わる「学び」を獲得できると考えた。

①保育の質評価の在り方、保育者の専門性とは

第2章の国内外の文献調査から、アジア諸国でも日本同様、国家の方針として「遊びを中心とした保育」が目指されてはいるものの、保育実践においては、教師主導型の保育、一斉的な保育が行われがちであること、また、その保育評価が難しいことが明らかになった。また、イギリスでは、保育のプロセスの質評価スケール「STTEW」等、「保育者の関わり」に着目した量的評価指標が研究されている。子どもの言葉を重視し、保育者や環境

との関わりをエピソード記録（ラーニング・ストーリー）で評価する「テファリキ（ニュージーランド）」や、子どもの遊びや作品に加え、保育者の学びへの貢献度について個別のエピソードで評価するスウェーデンの「教育的ドキュメンテーション」等を参考に、我が国の保育に適した質的評価の指標づくりを目指した。更に、分析的な視点で保育を評価するアメリカの取り組みや、詳細な記録を活かした複数の保育者・アトリエスタが相互評価を行うレッジョ・エミリア保育（イタリア）からは、評価の妥当性を高める方法について示唆を得た。

第3章では、本研究における「保育者としての専門性」を明らかにする手だてとして参考にした3つの事前調査について述べた。

【事前調査1】では、「造形活動における保育者の関わり」について、保育者の意識調査を行った結果、①教師主導型の関わりの見直し、②保護者への啓蒙、③子ども主体の保育観の理解、④保育者間の指導観の共有、⑤短期的、長期的視点での保育評価、⑥保育のふり返りに基づくカリキュラムの見直しの6点が課題となっていた。

【事前調査2】の「学生に期待する保育者としての専門性」のアンケート調査では、①基本的姿勢（前向き、一生懸命）、②ボランティア等、人と関わる経験、③保育技術の獲得（造形活動等教材研究）、④言語表現力、⑤子どもの発達理解が求められていた。

更に、【事前調査3】で行った「実習日誌の記録分析」によれば、日誌（記録）は、体験的な活動を省察し学びを言語化する貴重な機会であるが、学生は、「集団と個のバランスの難しさ」「現在形で書くことの難しさ」を感じていた。

以上の3つの調査結果で得られた項目は、開発した評価指標の検証に活用した。

続く、第4章では、開発する「評価指標」の意義を裏付けるため、保育現場の評価の現状に関する2つの調査について述べた。ここでは、「子ども理解」を基盤とする保育評価について調査から考察した。

【事前調査4】「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」の活用の実際と課題に関するアンケート調査、【事前調査5】保育所、幼稚園から小学校へ送られた要録（5歳児の個人記録）の実態調査、いずれの調査結果からも、「子どもの育ちの見とり」と「保育者の関わり」を関連付けた保育評価が必要であることが明らかとなった。そして、その記録を分析的に行うために評価指標が有効であると考えた。

②専門性可視化のための評価指標の作成

第5章では、＜研究1＞として、遊びを中心とした保育の質の評価指標の開発の経緯について述べた。本研究では、保育現場でのアクションリサーチによって収集したデータを帰納的に分析して評価指標を作成した。結果として、7つの大項目（物的な環境の構成／子どもの見とり／活動の展開／直接的な子どもへの関わり方／保育の計画やカリキュラム

の評価／生活／連携)・13の中項目(物的環境／安全への配慮・生活習慣／活動の導入・活動の展開(の方法)／関わり・表現方法／活動計画・保育内容／安全への配慮・生活習慣／職員間の連携・保護者との連携・関連機関との連携)に分類される27の小項目の視点を見出した。

この保育者の関わりに着目した評価指標「関わりの視点」を用いて、学生の体験的活動がもたらす学びを検証した。この際、知識や技能の達成度の量的評価ではなく、学生や保育者が自らの関わり方を見直せるよう、自由記述による記録を重視した。

<研究2>として、保育系学生が体験的な活動を通して獲得する「学び」は、

I. 人間性の涵養 【育む】

(社会性、人間性、市民性、キャリア形成)

II. 保育者としての専門的見識の獲得 【理解する】

(ものの見方、保育方法、自己有能感、他者との連携、責任感)

III. 保育表現技術や知識の習得 【心がける、習得する】

(物的環境、見とり、保育内容、関わり、活動計画、活動の導入、活動展開、表現方法、安全への配慮、生活習慣、職員間の連携、保護者との連携、関連機関との連携)

の3つに大分されることが明らかになった。

この3つの学びのうち、「III. 保育表現技術や知識の習得」の内容に関して、<研究1>で開発した評価指標「関わりの視点」27項目を用いて、学生の体験的な活動の学びを検証した。学生は、「III. 保育表現技術や知識の習得」の内容を広く学んでいたが、中でも「物的な環境の構成」「直接的な子どもとの関わり方」等に係る学びを多く獲得している。

③評価指標の検証

児童福祉・医療分野における造形活動では、高い保育の専門的知識・技能に加え、幼児や小学生に対する個別的でより丁寧な関わり方や活動計画(児童福祉分野<研究3>)、安全面への配慮・保護者との連携(医療分野<研究4>)に関する特徴的な学びが得られることが検証された。特に、医療分野においては、医療保育に特化した専門性に関する学びが得られた。学生の学びの特徴も明らかになったが、学生が体験的な活動に対して明確な課題意識をもち、継続的に活動することが大切であるとの知見を得た。

更に、児童福祉、医療分野の事例調査から、分野に限らず、評価指標が汎用性をもつことが検証された。

今回、造形活動を中心とする体験的な活動を通して「III. 保育表現技術や知識の習得」に係る学びを多く獲得していたが、今後の課題として、「I. 人間性の涵養」「II. 保育者としての専門的見識の獲得」に係る学びを自覚化させるための手だてを考えていきたい。学生の学びを補完するべく、体験的な活動を大学のカリキュラムにどう位置付けるかも問われているといえる。

審査要旨

本研究は、幼児教育の現場での造形教育がいかなる教育効果を生み出すのかといった従来からの問題に関し、評価項目とその基準を提起して、その実効性により一層の効果をもたらそうとするものであり、保育系学生や保育現場での日々実践に役立つものと言える。また、その評価基準自体が新知見と呼べるもので、かつ膨大な実践例から得られたデータに基づいて試作されたものとして一定の評価を下すことができる。

さらに、その視点が造形活動を中心とした学生の体験から得る学びとして捉えており、その視点を「学びの評価」として捉えた点に独自性がある。これまでの同類の保育関係の研究では、子どもの発達段階の学術研究が主となる傾向が強いが、本研究のように保育者の専門性向上に造形活動を中心とする体験的な活動が有効であるという論理は、今後の後発研究者にも大いに指針となる内容でもある。調査結果の分析等を通して得られた成果が保育者個々の専門性の向上ということにとどまらずに、幼児教育そのもののあり方への提言として意味を持つものとなっている点も評価されるべきポイントである。

学生の学びを客観的に明示するための指標作成の前提として、「学び」について主に心理学の文献調査を行い、指標の根拠となる理論を示している点は評価できるが、できれば認知科学などの文献にも当たり、最新の学習理論にも言及するとさらに良かった。幾つかの事前調査から仮説を立て、それに基づき指標を作成し、さらにその指標でデータを分析し、その結果から指標の有効性を検証する、一連の流れはデータに基づく論文として要求される構成となっていることは評価できる。

評価指標を用いることは、保育者としての意識的取り組みや改善に繋がり、幼児教育に貢献できるものである。この評価基準を定着させるためには、項目や集計法・その活用法をマニュアル化した一般書籍としての刊行や、回答者の負担を大幅に軽減するなどの努力が必須である点は指摘しておく。また、指標を意識しすぎるあまり、それに縛られたりすることのないよう、また現場でのケースバイケースの対応も可能になるような改善も必要である。

現在諸外国の保育評価のあり方及びその研究も多岐にわたっており、様々な国際学会で重要なテーマとして位置づいている事を鑑みても本研究が大変価値のある研究であることは明らかである。今後も研究を深めていき、そこで得られる研究成果に大いに期待するところである。